

〔博士論文概要〕

脳性まひ児の説明的文章の理解に係る力を育む指導法についての研究

平成29年度

加 藤 隆 芳

筑波大学大学院人間総合科学研究科
生涯発達科学専攻

第 I 部 序論

第 1 章 問題

脳室周囲白質軟化症（PVL）のため、痙直型両まひの状態にある脳性まひ児（以下、PVL児）には、全般的に知的能力の発達に著しい遅れはなくとも、国語科の学習において、論理構造に基づく話題の把握等の困難を示す者が多くみられる。PVL児の国語科の力を育むためには、文章理解、とりわけ、説明的文章の理解に係る力が求められる。

第 2 章 先行研究

本研究は、説明的文章の指導に新聞を活用する。そこで、新聞を教育に活用する活動（Newspaper In Education : NIE）の視点を含む文献抽出を実施した。また、学校現場における実践報告書類を対象に雪だるま式の収集も行い、244件を基に知見を整理した。

文章理解のつまずきには、語彙の形成との関連があり、認知や記憶、音韻発達等が背景となるが、PVL児は障害特性（運動・動作、認知特性、体験・経験の不足）も影響するため、これらを踏まえた継次的な指導を要する。記事を活用した読解方略の提示は、継次処理様式の指導法の一つとなると考えられるが、効果の実証的研究が少ないため、本研究で明らかにする必要がある。

第 3 章 目的と構成

PVL児には、物事を具体的に思考できる題材の提示が有効と考える。そのため、社会事象を取り扱い、主題を導く中心語句が示された見出しが示され、5W1Hを基本とした新聞記事に着目した指導法の検討を行う。具体的には、PVL児の障害特性が起因する学習困難像の明確化、NIE実践者への質問紙調査からの指導軸の抽出、PVL児へのNIE実践からの指導法検討を行う。

第Ⅱ部 実証的研究

第4章 脳性まひ児の文章理解の困難

研究1

目的・方法

PVL児の「読むこと」の状態像を明らかにするため、PVL児23名（対象児群）の学力検査結果 criterion-referenced test-II（CRT-II）の分析を試みた。対象児群には、CRT-IIの小1～中3の問題を、現学年の前から遡って受検させ、結果を全国平均と比較するとともに、全国的な学力調査の結果との比較も行った。また、対象児群に実施した心理検査 Wechsler Intelligence Scale for Children-III（WISC-III）との相関を確認して障害特性との関係を探った。

結果・考察

CRT-IIの対象児群と全国平均では、書く・読むに差があり、学力調査の学業不振児の傾向と類似している。ただし、対象児群の読むは、小3～4までは全国平均と同等以上である。論理的思考を伴う題材が用いられ、難易度が上がることで学習困難を来しはじめ、この背景には障害特性が関わる。WISC-IIIとの相関からは、文脈や構造の把握に関する困難が著しいのを、「絵画配列（話題の構成、抽象概念に関する項目）」との関係から確認した。

研究2

目的・方法

PVLの高校生の話題の構成能力の特性と課題を検討し、抽象的思考の困難の実態を把握するため、対象児51名に課した5W1H形式のワークシートへの記載から、話題の構成能力を検証した。

結果・考察

全回答の9.6%が誤答であり、そのうち事実と理由・感想の混同が69.8%を占めた。これは、話題の操作時の認知処理や記憶の保持等の問題が起因する語彙理解、因果関係の把握の困難が関係する。

第5章 脳性まひ児の障害特性を踏まえた指導方法としてのNIEの検討

研究3

目的・方法

日本NIE学会員175名への質問紙調査を行い、NIE実践に係る基礎情報、育成したい力・育成が難しいと考える力を把握し、PVL児への指導法に資する知見を得た。そこで、NIE関連論文から「読解力」「情報活用力」「メディア・リテラシー」

「市民性」「自己学習力」を抽出し、回答における有意差を確認した。

結果・考察

回答率 30.3%のうち、多数を占めた国語科（33.3%）、社会科（32.1%）の2教科間の意識の差異に着目した。国語科は、文章から得られた情報を基に自分の考えをもつ力の育成を重視し、文章理解を通じて客観的に本質を捉える力の育成に課題意識があると確認した。

第6章 脳性まひ児の説明的文章の理解に係る力を育成するための新聞記事を活用した指導法に関する事例検討

研究4-1

目的・方法

PVLの高校生が、新聞を読み、興味関心の幅を広げる指導法の検討を目的に、PVLの対象児を含む5名の高校生が選択した話題を継続的に読むことから、新聞を読む意欲の醸成を行った。

結果・考察

読むことへの意欲の醸成を通じ、見出しの中心語句への着目が可能となり、中心語句から話題の軸をつかむ学習ができた。言葉に親しむ機会を作り、継続した活動へとつなげるには、記事とともに、各種媒体から広く情報収集を行わせることが有効といえる。

研究4-2

目的・方法

見出しの中心語句の理解を深めることから、文章理解の力を育む指導について検討するため、PVLの対象児を含む4名の高校生に、見出しの中心語句の理解を深めることを通じ、話題の大体を理解する学習を行わせた。

結果・考察

中心語句の意味理解を深めることから、文脈に沿う思考が生まれ、話題の全体を理解することへつながった。見出しの語句を軸に記事を読み進める手順を示すことから、中心語句と既存知識のすりあわせによる、適切な意味理解がなされた。

研究4-3

目的・方法

見出しの中心語句の理解を通じ、話題の大体を理解する活動、理解した話題の中心語句を用いて、概要を述べる活動を3年間行い、説明的文章を構造的に読む力の育成をめざした。そのため、PVLの対象児を含む5名の高校生に、中心語句の把握、事実と意見の区別、要点の作成を行わせた。

結果・考察

中心語句への着目を継続的に行うことから、内容理解の誤りの減少、的確な内容理解、他者への簡潔な報告ができ、興味関心の幅の広がりが見られ、新聞記事の学習は、読み取り・表現のスタイルを育み、思考の幅を広げることに寄与すると確認できた。

第7章 脳性まひ児の説明的文章の理解に係る力を育成するための新聞記事を活用した読解方略指導に基づく指導法の検討**研究5-1****目的・方法**

研究4から導いた指導の方向性（意欲の醸成、中心語句への着目、具体からの概念形成）を基に、読解方略の観点から指導内容を検討してPVLの高校生10名を対象に実践するとともに、指導前後の変容を探り、指導法の効果を確認した。そのため、記事を活用した学習を展開し、学習前後に、同一記事の読み取りを実施し、前後の変容と教員10名の教員との読みの比較を行った。

結果・考察

対象記事の2つの主題の読み取りについて、対象児と教員を比較した。指導前の対象児は、教員との乖離が大きく、内容誤認もみられたが、指導後は2つの話題が整理された。中心語句と話題の構成への着目を促す読解方略指導からの変容である。記事を活用した読解方略の提示には一定の有効性があるといえる。

研究5-2**目的・方法**

対象児のうち、困難が著しい1名への読解方略指導の過程を分析し、指導法としての意義と課題を明示するため、学習集団への指導39回のうち、対象児への指導（19回）を取り上げ、読み取りの変容を確認した。

結果・考察

5つの読解方略（中心語句、語意、事実と自分の感想の区別、事実と意見の区別、考えの形成）を選定し指導したところ、主体的な文章理解が可能となった。中心語句への着目から読みの視点を得た結果、意欲の向上を契機に、中心語句の文中の意味理解、見出し以外の中心語句の抽出、概要説明での語彙数増加がみられた。また、事実と意見の区別を行うことで、話題の概念整理を習得した。

第Ⅲ部 考察・結論

第8章 本研究の結論及び総合考察

結論

脳性まひ児の説明的文章の困難

説明的文章の理解の習得とつまずきに特異性はないことが確認されたことから、基本的には、定型発達児への指導を踏まえることが肝要である。また、PVL児は、問題解決に関する方略の使用、自発的な方略選択が困難につき、読解方略指導による読み方の学習を要する。

脳性まひ児への新聞記事を活用した指導の意義と留意点

新聞記事は、見出しの中心語句、情報伝達を目的とした定型(5W1H)、実感を抱きやすい題材を提供する。方略選択に困難があるPVL児にとって、イメージがもてる題材のなかにある文章理解の手がかりは、効果的な理解につながる。ただし、難解な熟語が多いため、発達段階の把握等の細やかな指導を要する。

脳性まひ児への新聞記事を活用した指導の成果と課題

中心語句の意味を文脈に則して捉えることは、文章全体の理解を促すとともに、「文章からの学習(text base)」が可能となる。また、自己の既有知識と総合による推論、新たな概念の形成等の「文章による学習(状況モデル)」へと発展し得る。記事を活用した文章理解の学習は、読解方略の習得を主とする視点が必要である。

脳性まひ児の説明的文章指導への提言

説明的文章理解のスタイル

PVL児の説明的文章理解の困難は、障害特性が深く関し、特に、体験不足や認知特性が、話題の把握、文章構造や構成の把握を困難にさせる。PVL児の場合、多くは継次処理優位の認知様式であるため、これに応じた指導計画の立案が肝要である。

説明的文章の理解の指導における題材

説明的文章の理解では、話題を有意味な理解が、text base、状況モデルを促進する。記事は、実感をもった思考が可能な題材の希求が容易であり、中心語句の掲出、定型による記載から、読解方略への意識が可能となる。他形式の文章よりも、説明的文章の理解に係る力の育成における初期段階の学習に有効と考える。

研究の意義と課題

PVL児は、継次処理優位の様式により、力を育むことができる。その際、新聞の特質はPVL児の認知様式を踏まえた指導を有効にする。ただし、本研究は新聞に限定した検討であり、新聞を通じて身に付けた読み方を他の形態の文章でどのように活用されるのか、今後の検討を要する。